

MUGENDO

# Marathon

Part2

Sample

For Adults Only

# Marason Part2(sample)

とりさん

以下本編より抜粋。書式は本編と同一です。あなたの環境で正常表示できるかご確認下さい。本編には伏せ字はありません。

## 1

僕は部屋を片づけ、手早く掃除をして、「行為」の痕跡を全て消した。汚れたシーツを洗濯機に放り込んだ。あまり家に人は呼ばないが、こういうのはさっさと片づけた方がいい。気分的に日常に戻れなくなる。「道具」の類もクローゼットの奥にちゃんとしまった。予定通りならまた来週には、活躍することになるわけだけど。

ご飯を炊いて、作り置きのカレーを温めてかけ、昼飯にした。朝飯抜きになってしまった。

大樹君も朝飯抜きだな。今頃どうしているだろう。「気持ちの切り替え」どころじゃないだろうな。

明日は普通に学校に行けるんだろうか。かなりひどいことをしたと思う。でも僕には後悔はない。それどころか満たされた気持ちでいっぱいだ。

僕はビデオのデータをパソコンに吸い込み、一通り鑑賞した。素晴らしいできだった。自らを……ちよつと見、強く強要された上の行為には見えない。淫らな少年奴隷。貴重な映像だった。値段なんてつけられないくらい。

夕食後、僕はスカイプにログインして、ある友人のログインを待った。

彼のハンドルネームは「れいじくん」という。

彼は僕に輪をかけた実行派で、僕より少し若く、僕が勤務医になってから行動面では隠遁気味だったのに対して、バリバリの現役だ。何人かと組んで、■■■学生を対象にした塾を経営している。困った男だ。でも実際はかなり慎重で、計算高く、僕のこつち方面の友人では、もっとも信用できる。

彼は現在進行形で、もうすぐ■■■の「恋人」を持っている。大樹君より一つ上だ。■■■から仕込んであるから、かなりのことができる。去年のゴールデンウィークに、■■■になったばかりのその子に会える機会があった。れいじくんが3Pをしたいと言うのだ。僕は嫉妬心もあったけれど、もちろん飛んでいった。彼と僕は好みが似ている。「だいちゃん」と呼ばれているその彼の「恋人」は、大樹君よりは少しぼつちやりしていて、からだも大きめだけれど、とてもかわいかった。

だいちゃんはいじくんの言うままに、僕のペニスを……

まあ、異常なまでの体験に、精神的に社会復帰できるまで時間がかかったのを覚えている。道すがら見かける少年の誰も彼もを、犯してやりたくなった。

僕たちは二人とも自宅サーバーを持っていて、互いに、二人だけがアクセスできるエリアを持っている。本当にきわどいオリジナルのデータを、そこで共有していた。このところ僕のは古いのばかり、彼は現在進行形のだいちゃんの動画が主だ。十二月に青姦までしていた。彼らはどこまで行くのか僕にもわからない。

八時過ぎ、彼はやつとオンライン状態になった。僕はキーボードに向かった。

JUN…こんばんは

れいじくん…おひさー

JUN…おひさでもないだろw この前チャットしたの元旦じゃなかったっけ  
れいじくん…そうだったかな、ま、今年もよろしく

JUN…その挨拶もう遅いつてw

JUN…それより今日は大事な用がある。例のフォルダを見てくれ  
れいじくん…お、新年早々新ネタ？ 楽しみー



れいじくん…でかいな。H D 動画だね。

J U N…うん。今回はとびきりの危険物だ。取り扱い注意で頼む  
れいじくん…ますます楽しみだね

数分、沈黙が続く。互いに光回線とはいえ、十分以上のH D 動画は、相当重い。

れいじくん…きた！

J U N…開ける？

れいじくん…O K みたいよ

れいじくん…これ、すごいね。

れいじくん…すごいな。でもセンセイひどいね。ついに本性を現したって感じw

J U N…君にだけは言われたくないw それにセンセイは君だろ

とは言ってみたものの、そういや、最初の「自己紹介」で大樹君は僕のことを「ジュン先生」って呼んでたっけ。

れいじくん…だって僕無理矢理は苦手だよ。優しいお兄さんだし

J U N…よく言うよ

れいじくん…すごい。しかもかわいい。■年生くらい？

JUN…■年生。ただ早生まれでまだ■歳だそうだ

れいじくん…小柄だね。癖毛がいい。目つきがたまらないね。色白の、丸顔。胸の文字はセンスに欠けるけどね

彼が見るところはだいたい、わかっている。好みは僕に似ている。

JUN…余計なお世話だよ

れいじくん…エロい。よくここまで仕込んだね。でも内緒にしてるなんてひどい  
れいじくん…僕がうらやましいとか言っておいて、こんな子飼ってるなんて

JUN…飼ってないw

JUN…冗談は置いといてね、実は今日一日で、っていうか何時間かで、ここまで持っていた  
少し間があった。

れいじくん…マジですか！

JUN…マジだ。どれだけヤバイことしたか、想像つくだろう？  
れいじくん…犯罪者だね、センセイ

JUN..それはお互い様だろ！

れいじくん..自由恋愛は対象の年齢性別を問わず、合法だ。僕法律では

JUN..そいつは聞き飽きた。大いに共感する。でも今のところ僕の問題は、他人が決めた法律の方だ  
れいじくん..うん

JUN..例の契約、半分冗談だったけど、今回は本気だ。僕の連絡が途絶えたら……

れいじくんとチャットを終え、僕は手早く大樹君の動画を編集した。射精部分を含む三十秒を抜き出して、携帯でも再生できるサイズと形式に変換した。HD動画は横が長い。トリムが面倒だった。

僕はそのままパソコンに向かい、ブラウザから Gmail のログイン画面に移動した。ログインし、iPhoneを見ながら、大樹君のアドレスを打ち込んだ。

From:JUN<xxxx.jun@gmail.com>  
To:hiroki.xxx@gmail.com

件名:JUNです。今日はありがとう

大樹君へ

今日はありがとう。君は最高だった。

今日の君の姿を、少しだけ見てもらおうと思う。動画を添付した。このメールを読んだら、必ずすぐに開いて、全部きちんと見ること。君は奴隷だから、僕の命令は絶対だ。ただもちろん父上がそばにいたら別だよ。一人で見ること。音も出る。要注意だ。動画はメディアプレーヤーで開くはずだ。

明日夜、またメールを送るよ。それまでには動画を、見ておくようにね。一人の時間、あるだろ？

じゃ、おやすみ大樹君

JUN

僕はまた大樹君にメールを送った。昨日のメールが届いていないはずはないが、特に返信を求めた内容ではなかったし、迷惑メールに入ってしまった可能性もないわけじゃない。今日は返信を求めていると考えた。ただ携帯メールみたいに、すぐにメール着信がわかるわけではないから、とんとんと往復はできないかもしれない。僕は仕事が終わってすぐに、電車内からiPhoneでメールした。七時前だった。

大樹君こんばんは。JUNだよ。昨日のメールは見てくれたかな



返信はすぐに来た！ 三分と経っていなかった。

見ました。大樹……

その後も、大樹君は皆勤で走っているようだった。僕の方がいい加減だったり仕事が早出だったりして、水曜と土曜は、会えなかったけれど。健康そのものの少年だった。あの日の媚態。誰にも想像できないだろうな。僕だって幻覚だったのかと思い始めたくらいだから。

でも日曜はやってきた。一応土曜の晩に、確認メールを送った。大丈夫です、明日よろしく願います。大樹 と、ちゃんと返事が返ってきていた。

## 2

ドアチャイムが鳴ったのは、一時五分前だった。この几帳面さ。大樹君に違いないと思った。僕はいそいそと玄関に走って、ドアスコップを覗いた。そしてぎよつとした。

魚眼レンズの歪んだ視界には、ちょこんと立った大樹君が見えた。……しかし彼は一人ではなかった。ずいぶんからだの大きい大人が、横に立っている。

僕はからだを翻してドアにもたれ、心臓が口からせり出してくるんじゃないかと思うほどの衝撃を何とかこらえようと胸を押さえた。

大樹君は約束を破った！ 横にいるのはたぶん父親だ。

「先生、先生？ 大樹です。こんにちは」

僕の家にはインターフォンはない。大樹君は遊びに来た親戚の子みたいで、ドアの向こうから僕に呼びかけている。ドアをノックした。一体どうなってる……

どうせ逃げられない。ひらきなおれ。

「あ、ああこんにちは……ひ、大樹君、君は……」

僕は落ち着きを失って、しどろもどろだった。僕を見上げる小柄な大樹君の表情は、いつそう引き締まった。

「先生、約束破って、ごめんなさい。お父さんを、連れてきました」

「ごめんなさいって……」

ごめんなさい？ 一体どういう意味だ？ 相変わらず大樹君は、僕の支配下にある気なのか？ だったらなぜ、父親を連れてきたりしたのだ？

「ごめんなさい、先生。でもどうしても、こうしなきゃいけなかったんです。お話、聞いて下さい。お

願います、先生。そのあと、何でもします。がんばりますから……」

大樹君の父親は、寒いドアの外で、立ちつくしていたが、彼に呼ばれてやっと動いた。でかい。ドアをくぐるように頭を下げて、玄関の中に入ってきた。

身長一八〇を軽く超える大男で、いかつい髭面だった。肌は褐色気味で、見事なほど息子と似ていなかった。服装は息子とお揃いに近く、濃い茶系地に白い袖のスタジャンに、コールテンの、これも濃い茶系のズボンを着ていた。腰周りも太い。ズボンがはち切れそうなくらい、太腿も太い。プロレスラーみたいだ。歳は僕より、少し上だろう。でも四十はいつてないように見えた。

「僕、先生に会って、その後、もしかしたら、って思ったんです」

「先生は悪い人かもしれないけど、嘘を言わない人だと思えます。僕は形だけの慰めなんていらない。同情なんかされてもしようがない。そんなの僕には何の力にもならないんです。先生は僕に価値があると認めてくれた。手放したくないって言ってくれた。先生は約束も、守る人です。僕は約束、破りました。だからお仕置きされてもいいです。……ビリビリは、嫌だけど……。でもがんばるから、見捨てないで……」

「ちよちよちよ、ちよつと、待ってくれ……」

「君は僕を評価してくれたようだから、そう、正直に言おう」

あれだけひどいことをした僕に、そんな発想を持ったのか、この子は。

「でも大樹君、君は一つ大きな勘違いをしている。君は僕の奴隷だ。そうだよ」

僕は幾通りかの少年愛者のネットワークを持っている。オリジナルの写真やビデオを売買や交換する関係の人たちは、二十人ちよい。みんな顔も本名も住所も知っていて、一度は実際に会っている。ある程度のお金と、守るべきものがあり、バカではなく、行動が慎重であることが、僕がそういう関係に人を加える条件だ。僕やれいじくんはほぼ売る側、他は買う側だ。

大樹君の表情に、期待めいたものが拡がったように見える。目がぱっと開かれている。会話の異常さとアンバランスな、子どもらしい愛らしさだ。小遣いを上げてやるって言われた■学生みたいな。

「ただ、君はどこからそんなことを思いついたのか、気になるな。それにお父さん」

嫌な予感がするな。

「それがなくなるくらいなら僕、本当に先生にどうされてもいいです。好きなようにめちやくちやにし



て、殺して下さい。僕は先生のものなんだから」

大樹君の言葉には正直そえられる部分もあったが、僕はさすがに手を振って、彼の話を選った。

「めったなことを言うもんじゃないよ。それに君を殺しても僕には何の得もないし、そんな欲求もないね。でも覚悟のほどは聞いた。その気になったらめっちゃにやしてやるよ」

「僕はね。お父さんにも相応の覚悟を決めてもらおうと思います。深い罪に踏み込み、秘密を僕と、大樹君と共有するんだ」

すぐには意味はわかるまい。父親にも、大樹君にも。

「簡単なことです。今ここで、お父さんが大樹君を犯す。言葉が強すぎるなら、セックスする、でもいい。それを僕がビデオ撮影し……」

「お父さんお願い。僕を……だからお願い、きいてよ」

ものすごくそえられる、大樹君の懸命な言葉。僕は気持ちの高ぶりを抑えつつ、立ち上がった。

「傷つければ奴隷の値打ちは下がってしまう。でも目立たないところなら関係ない」

「お父さん！ ……僕、僕嫌だよ！ 助けてお父さん！」

大樹君をしがみつかせたまま、父親はのっそり立ち上がって僕を見下ろした。仏像にも魂がこもるところはあるらしいな。彼の目にはいくらか人間らしい生命力が蘇っていた。憎しみや軽蔑をこめた目で、僕を高いところから見下ろしている。でもね、憎しみはともかく、僕を軽蔑する資格は、たぶんあんたにはないんだよ。

「始めましょう。ベッドルームにどうぞ。……さあ！」

### 3

「恐がることはない。さあ、こっちへ」

大樹君の下着はランニングシャツだ。彼はためらうことなくそれも脱ぐ。脱衣の際の大きな腕やからだの動きで、幼くしなやかな肉体の筋肉が、薄い脂肪の下で豊かに伸縮する。あらためて美しく、エロティックな肢体だ。

大樹君が唇を離すと、父親が服の袖で唇を拭った。何か未知の生き物を見るような目で、彼は頬を朱<sup>あか</sup>らめる息子を見ていた。「ヒロ……」と小さな低い、掠れ声が漏れた。

これはご立派。勃起していないのに、長さは二十センチ以上ある。残念な僕の平凡なペニスと比べると、太さは径で倍くらいか。一応言っておくけれど、僕だって小さくはない。ごく普通だ。雁首の部分はぐっと太くて、露出した亀頭は黒々とした感じがする。まあ、大樹君のピンクの亀頭と比べればね。

父親のペニスに、やっと変化が訪れた。むくむとふくらみ、持ち上がってくる。大樹君はさらに、お父さんのペニスに鼻息がかかるほど寄って、一心不乱に手を動かしている。額に汗が浮かんで、頬が朱らんでいた。

子どもは変わりやすい。変えやすい。彼の常識、価値観、道徳は、僕が作る。大樹君は僕のものだからだ。

父親のペニスはお腹の方に近づくくらい十分に勃起した。でかいな。ゲイビデオの巨漢の黒人にも見劣りしない。弓形にそそり勃った大人のペニスは、大樹君の唾液でてらてらとして、かたそうで、それ自体が一個の淫らな生き物のようだ。

「く……」

これまでで一番大きな反応を見せた父親は、大樹君の頭を押し、腰を引いた。濡れた亀頭と大樹君の舌の間に、唾液が糸を引く。たぶんイキそうになったわけじゃないな。

「お父さん……」

耐え難い快感、というのも考えてみれば逆説的な表現だ。

早く異常さに慣れてしまえ。楽になれるぜ。

大樹君は右手でお父さんのペニスを握ったまま僕にうなずいて見せた。口の周りは唾液まみれだった。もしかしたらお父さんの先走りもね。

ぼんやりした目で、ゼラチンの塊みたいな精液を舌に乗せ、口の端からよだれを垂らす大樹君のアッブを撮った。

## 4

それから、バルーンって器具だ。これはアナルに入れてからポンプで空気を入れてふくらますわけだけど、僕にはもう一本ホースとポンプがついていて、バルーン先端に向けて突き抜けている。栓をした直腸内に、液体を注入できる。しつかりふくらませば、多少圧力をかけても抜けない。



すごい肉体だ。褐色の肌に包まれたその大きな体躯の、肩の筋肉は盛り上がり、胸筋はせり出し、腹筋はきれいに割れて、無駄な脂肪はごく少ない。わずかに腰のあたりにたるみがあるくらいだ。ある時期までは息子と一緒に毎日ジョギングしていたわけだけど、どちらかと言うと短距離型、たくさん筋肉のついた肉体だった。

「く！ う！」

大樹君は激しく反応した。意外な感覚だったのだろう。力んだからだをねじって、僕とお父さんの方を見る。自分のお尻の穴がどうなっているのか、体内で何が起こっているのか、彼には確かめることができない。

「あ！ だ……め！ くる、しい」

大樹君はくつと首を持ち上げて、続いて、ちょうど犬が体毛にしみた水分を弾き飛ばす時みたいに、下半身を震わせた。

「大樹君、どうした？ どうしてほしい」

「くる、しい。ぬい、て……」

大樹君は涙目で、高い掠れた声で、僕に訴える。お父さんはポンプを手にしたまま、かたまっている。

「ここで抜いちやって本当にいいのかい？ お父さん！」

「あ！ まって、ま……あ」

大樹君は手を上げて僕の言葉を遮った。

## 5

大樹君のからだをきれいに拭いて、寝室に戻った。とても寒そうだ。これからお父さんに温めてもらうといい。

僕は父親に全裸になってもらう。いったん引き締まった腰は、臀部へと向けまたどつしりと太くなり、ズボンの上からもわかった立派な太腿は、皮膚の上からでも筋肉の走りがよく見えた。胸毛はなくさほど毛深い方ではないが、ヘソの下から陰部、太腿の上部までは、しっかり大人の体毛に覆われている。今性器は萎えているが、それでも僕の勃起時より大きかった。残念だ。

「大丈夫ですよ。申し訳ないが、先週僕は太樹君とアナルセックスしました。ああ、こういう言い方がフェアでなければ、僕は太樹君を、レイプしました」

「ん……」

太樹君はちよつと白い歯を見せ、短い声を漏らした。ぞくぞくつとからだを震わせながら、人さし指

を押し込んでいった。すぐに根本まで入った。

二本に増やされた、節のある大人の指が、大樹君のアナルをいびつに捻げながら侵入した。

「ん、ああ！」

遠慮のない声が大樹君から漏れ、そして右手が、お父さんの腰に伸びた。抱きつく。お父さんも右腕をしつかりと大樹君の首の後ろから背中に回し、抱き寄せた。慣らす指は動き続ける。

大樹君を再び仰向けにさせた。タツパの差が圧倒的だから、腕枕のままで、左手で十分大樹君のアナルを責められる。父親はバイブの根本、電池の入ったコントローラー部を握り、先端の小さな玉を大樹君のアナルに押し当てた。

父親は大樹君のペニスを左手の三本指でつまむ。彼のごつい手の、全部の指で握るには大樹君のモノは小さすぎるのだ。

十分だ。そろそろ本番と行こう。父親のペニスも、ガチガチで、しっかり反り上がって元気だ。赤黒い亀頭の先の鈴口は、たつぷりとカウパー腺液を流し出していた。

彼の目つきには今や、酔った人間のような独特の、理性から解放された者の輝きがあった。

でも感覚はまるで違う。対象は我が子で、まだ発毛もない、しかも男の子で、性器の犯す先はその肛門だ。

大樹君がそのお父さんの手首を、足から離れた手でぐっと握る。

快感の吠えるような短い声をたびたび漏らし、激しく腰を使った。限界の深さまで突かれるたびに、大樹君のからだは前にぐっと押され……

淫らな、湿った摩擦音。親子の荒い息遣い。いかつい大男の、動物的な目つき。力のこもった下半身の筋肉の隆起。

「ん！ イッ！ ア、ア、あ！ おとう、さん！」

「ヒロ……！」



その時、大樹君が、

「あのう……」

と何か言いにくそうに話しはじめた。

「何かな」

僕は座り直し、大樹君に微笑みかける。

「お願いが……」

大樹君は、上目遣いで僕の反応を窺うようにしてぼそぼそと語る。

「いいね。じゃ、ご主人様として、もう少し君に注文しよう」

## Epilogue

思わぬ展開があつたのは、水曜日だ。小雪が舞い、冷え込みが厳しかった。夜中、僕はもう入眠してはいたはずだけれど、時ならぬチャイムの音に飛び起きた。ドア―チャイムだとわかるのに、少し時間がかかった。目覚まし時計を見ると、一時前だった。

続いて、どんどんどんと、ドアを叩く音がする。こんな時間に誰だ？ 何事だ。……もしかして警察か？ やはり僕は大樹君ら父子に裏切られたのか？ いや、僕には心当たりが多すぎる。全く別の理由で、いつ警察に踏み込まれてもおかしくはない。

「お父さんが……」

「お父さんが？ お父さんに何かあつたのか」

続きは本編で！ 本編は108P。7章＋エピローグ。約五九〇〇〇字。